

■ 米中関係に改善の兆しなら一段のドル高期待

本欄の前回更新分において、本来ならユーロ/ドルの日足チャートを提示するつもりが、誤ってドル/円の日足チャートを提示してしまい、ここに慎んでお詫び申し上げたいと思う。そこで今回は、あらためて両通貨ペアのチャートを提示し、今後の行方を展望しておきたい。

まずはドル/円だが、下図においても確認できるとおり、10月半ば以降はずっと一目均衡表の日足「雲」上限ならびに89日線が下値を支える役割を果たしており、足下では暫く上値を押さ



えてきた21日線を上抜ける展開となってきた。

今後も日足「雲」上限が下値サポートとして意識されやすい状態は続くと思われるのだが、同時に日足の「遅行線」が明確に日々線を下抜けるかどうかという点にも要注目。また、ひとたび上抜けた21日線が今後は下値サポートとして機能するかどうかという点も見定めておきたい。

まずは、明日(11/02)発表の米雇用統計や11/6の米中間選挙の結果を見定めたいとする向きも多いと思われるが、それらのイベントを通過した後は一定の方向性が出てくる可能性もあろう。カギを握るとされるのは、やはり米・日の株価動向と米中貿易戦争の行方ということになるが、現時点においては両方ともドル/円をもう一段押し上げる材料に十分なり得ると見る。

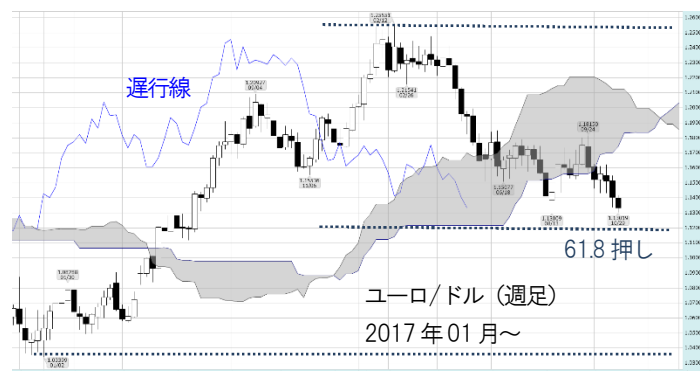
ことに注目されるのは、11月末にG20首脳会合の場で実施されると見込まれている米中首脳会談の行方であり、それによって「両国の関係が多少なりとも改善するか否か」の見方は市場でも分かれる。個人的には「米中間選挙が終了・通過することで米国側に妥協の余地が生じ、ようやくある程度の落とし処といったものが示される」との読みで、焦点は事前に両国首脳からどの程度までの言及がなされるかという点であると思われる。

過日、トランプ米大統領は米FOXテレビとのインタビューで、対中貿易に関して「素晴らしい取引を見込む」といったやや楽観的な見解を述べたとされ、大したアテにはならないことも承知のうえで個人的には期待したい。中国の習近平国家主席がやや窮地に立たされていると見る向きもあり、そうであるとすれば中国側にも大いに妥協の余地があるということになる。

さしあたって、ドル/円の上値は昨年7月と11月、今年10月初旬につけた114円台半ばから後半にかけての高値水準が目安になると思われるが、同水準から115円処を超えてくると一気にそこから上値余地が広がってくるものと思われる。

一方のユーロ/ドルは、右図に見るように10月初旬以降、一目均衡表の週足「雲」を明確に下抜けているうえ、足下では8月安値=1.1301ドルに顔合わせするような格好となっている。

仮に、同水準を下抜けると昨年1月安値から今年2月高値までの上昇に対する61.8%押し水準であり、かつまた週足の「遅行線」が週足「雲」下限に達する可能性があると思われる水準、つまり1.1200ドル前後の水準というのがまずは意識されることになるものと思われる。



(11月01日 11:05)